

(平成 22 年度卒業生・修了生宛て動画メッセージ)

卒業生・修了生のみなさん。そして御子息・御息女の卒業・修了を心待ちにしておられた御父母のみなさん。

本来であれば、私の挨拶は、多くの人々が集う、紅白の幕に彩られた厳粛な卒業式、本学の正式の名称で言えば学位記・卒業証書授与式の会場で、式辞というかたちで述べられるはずでした。女子は振袖と袴姿やワンピース姿、男子は大人じみたスーツ姿の華やかな雰囲気、私もモーニングに身を包んで、厳粛な気持ちで式辞を述べる積りでいました。しかし御承知の通り、3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震という未曾有の大震災のために、卒業式は中止のやむなきに至りました。代わりにこの動画を通して、卒業生・修了生のみなさんに、学長としての心からのお祝いと、はなむけの言葉を送らせて頂きます。

まずみなさんが心待ちにしておられた、人生の大きな節目の式典である卒業式を中止せざるを得なかったことに対して、お詫びを申し上げます。ホームページで中止を発表した後、メール等でさまざまな声が寄せられました。これだけの未曾有の災害の直後に卒業式をやるのは不謹慎だ、やっても自分は出なかったらという意見もありました。卒業式の経費にかかるおカネは義捐金として寄附したらいいという意見も寄せられました。一番多かったのは、残念だがやむを得ないというものでした。卒業式の中止という大学の判断に、ご理解を頂いたことに感謝いたします。しかし中には、被災地でも卒業式をやっているのだから、本学で卒業式やめることは納得できないという意見もありました。一生の思い出として学業生活最後の卒業式を本当に待ち望んでおられたのだと思うと、改めて中止したことを大変申し訳なく思いました。

既にホームページで「学長メッセージ」という形で、卒業式の中止の理由について述べさせていただきましたが、まず何よりも駿河台大学の学生たちの安否が気遣われます。東北地方には、4月から入学予定の人を含めれば500人近い駿大生がいます。各学部のFAの先生方と学生課を中心に全力で安否確認を続けており、今のところ生命に関する被災の情報は入っていませんが、卒業予定者の中にもなお連絡の取れない人もいます。家の全壊、半壊などの被害にあった人は何人かいます。避難所暮らしや、どこか安全な場所への避難を余儀なくされている人もいるでしょう。もちろん駿大生ばかりではありません。死者・行方不明者を合わせて2万5000人を超えという戦後最悪の自然災害となり、命を奪われた人ばかりでなく、避難所暮らしや、壊れた家で電気も水道もない生活を余儀なくされている人たちのご苦労は筆舌に尽くし難いものがあることでしょう。物資の不足も深刻なものと報じられています。私たちは、できる限りの支援の手を差し伸べなければなりませんし、また卒業式の華やかさを避けて厳粛にお見舞いの気持ちを表すべきではないでしょうか。

卒業式の中止には、より現実的な理由もありました。大学の中にもはっきり体を感じるような余震が続いており、式典の安全の確保に不安がありました。節電に協力する必要もありますし、計画停電と重なれば、みすばらしい卒業式になってしまうことも予想されます。更に卒業生・修了生、御父母、見送る在学生と大勢の人を集めて電車が止まれば、大きな混乱も危惧されました。それらの理由から、卒業式の中止の苦渋の決断をしたところで、改めてみなさんのご理解をお願いしたいと思います。

しかし状況の好転を見計らって、卒業生・修了生と教職員、そして無論御父母のみなさんも集まることのできる卒業式に代わる企画を考えたいと思っています。振袖や袴が似合う形になるかどうかは分かりませんが、みんなが顔をそろえ、このキャンパスで過ごした

日々を振り返り、この大学で築いた人間の絆を確かめ合い、そして大学として改めて卒業・修了に対するお祝いの気持ちを表す場を考えたいと思っています。詳細が決まればホームページなどでお知らせしますので、卒業・修了後も大学のホームページに注意してくださるようお願いいたします。

さて、今回の大災害は、自然の持つ力の巨大さと恐ろしさをまざまざと見せつけました。昨年日本で話題になり、人々に感動を与えた出来事のひとつは、日本が打ち上げ、7年の歳月と60億キロメートルの飛行を経た小惑星探査機はやぶさの地球への帰還でした。私たちは、科学技術の偉大さに目を見張り、日本の技術力の高さを誇りに思ったものです。確かにはやぶさの偉業は間違いのないところですが。しかしそれだけ進んだ科学技術の力をもってしても、今回の大地震と津波は、予知することができませんでした。それどころか、これだけの破壊力を予想し、それに対して備えることもできませんでした。私たちは、人類はまだ自然の力の前では無力な存在であることを知り、自然を支配することができるようになったなどと考えることなく、この地球上で自然と共に暮らしていくことを考えなければならないでしょう。

地震と共に、総てのものを押し流し、そして引いた後は余りにもむごい惨状を残した津波の恐ろしさは、言葉で言い表すことができません。しかし同時に、私たちは、被災地で力強く立ち上がる人々、助けあう人々の姿も見えています。一進一退を告げている東京電力福島第一原子力発電所の事故に対しては、現場の作業員その他、自衛隊や消防が懸命の努力を続けています。アメリカのルース駐日大使は、「難局に対して日本国民は強靱（きょうじん）さを示し、礼節を保って互いに助け合っている」と述べ、被災民らの落ち着いた行動を称賛しました。またアメリカの新聞ウォールストリート・ジャーナルは、「不屈の日本」という社説を掲げました。そういう被災地の人々の姿を見ると、遠く離れた首都圏で買い占めに走っている人々の姿

がとても小さく見えます。

16 年前の 1 月 17 日、阪神淡路大震災がありました。学部の卒業生の皆さんはまだ幼い時期でしたが、それでもはっきり記憶に残っていることでしょう。そして今回の大震災です。被災しなかった人々にとっては、無事に生きていることが奇蹟のように思われるかもしれませんが、実際、生きているということは、奇蹟です。私たちにとって大切なことは、この生きているという奇蹟をどう生かすかです。

もう 50 年以上前の昭和 27 年に公開された黒沢明監督の「生きる」という映画があります。平凡な市役所の課長が、胃がんで余命いくばくもないと知って、やけくそな生き方を始めたものの虚しさを覚え、今度は人が変わったように、住民が望みながら実現しなかった公園の建設の実現に奔走し、完成した公園のブランコに一人揺られながら、「いのち短し、恋せよ乙女」という「ゴンドラの歌」を口ずさみながら息絶えるというストーリーです。彼の死後、公園は元気に遊ぶ子供たちの歓声で満たされました。自分の命の限りを知った主人公が、最初試みた享樂的な生き方の中にはなく、人のために何かをすることの中に生きることを価値を見出す物語で、世界のクロサワと言われた名監督の代表作のひとつとなり、翌年のベルリン国際映画祭ベルリン市政府特別賞を受賞しました。映画「生きる」は、生きているという奇蹟の活かし方のひとつの方法を示しています。

今回の大震災では、まだボランティアを受け入れる状況にはありませんが、被災者のためにできることはいろいろあるでしょう。既に本学のボランティア支援室の学生は、街頭募金に立ってくれました。街に行く人々がこれまでになく千円札や五千円札や 1 万円札を入れてくれることに感動したと語ってくれました。そのほかにも、例えば節電に気を使ったり、車を走らせるのを控え、それだけガソリンが被災地に回るようにすることも、被災者たちへの協力の示し方のひとつです。大切なことは、頭で考えていることでなく、具体

的に行動することです。あるいは表現することです。今回の大震災には、多くの国から救援の手が差し伸べられています。救援隊を派遣してくれた国は数知れませんが、その他にもイギリスの新聞インディペンデント・オン・サンデーは、1面で日本国旗の上に日本語で「がんばれ、日本。がんばれ、東北」と巨大なメッセージを掲げました。ロシアの新聞ノーバヤ・ガゼータの電子版は、「我々はあなた方と共にある」と題する特集を組みました。外国ですらそうです。阪神淡路大震災のときに幼かったかったみなさんと、駿河台大学で学んだみなさんは違います。今こそ日本人として、被災した人々にどのように自分たちの気持ちを表現することができるかが問われています。

こう考えると、卒業式の中止は小さなことのようにも見えてきます。皆さんの巣立つ社会の経済状況の厳しさも、小さなことかもしれません。卒業式の中止はとても申し訳なく思いますが、被災者の支援に限らず、皆さん方一人ひとりが駿河台大学で学んだことを踏まえ、駿河台大学の卒業生であることの誇りを胸に、これからの社会生活の中で、人間として立派に行動してくれることを望んでいます。4学部の卒業生 961 名、3 修士課程の修了生 27 名、1 専門職学位課程の修了生 59 名の今後の活躍を真剣に願っています。日本国民の試練のこの時期、それぞれの分野で、共感と使命感に燃えて思い切り羽ばたいてください。おめでとうの言葉が最後になってしまいましたが、みなさんの卒業・修了をお祝いし、卒業式の式辞に代わる私からのメッセージとさせていただきます。心から、みなさんのご健闘をお祈りしています。

平成 23 年 3 月 25 日
駿河台大学学長
成田 憲彦